



株式会社明治学院サービスは、
学校法人明治学院の100%出資会社です。
学校の周辺業務を事業化し効率的効果的な
各種サービスの提供を行い、
その収益を教育事業に還元することを
目的としています。

【主な業務内容】

◆人材派遣ビジネス

明治学院（明治学院大学、高等学校、中学校等）及び教育機関や他学校を中心に学校事務に特化した人材派遣を行っています。学校関連企業として相応しい質の高いサービスの提供に努めています。

◆明治学院白金チャペルでの結婚式

当事者のいずれかが、同窓生、現・元教職員、法人役員またはそれらの近親者の方であればお申し込みいただけます。本学はプロテスタントのキリスト教信仰を建学の精神としており、礼拝に準じる儀式としての挙式を行います。

◆学生総合保険・海外旅行傷害保険・火災保険・自動車保険（バイクを含む）・医療保険などの代理店業務を行っています。

◆白金校舎パレットゾーンの食堂・横浜校舎のインターナショナルカフェの運営管理をしています。

◆新入生、在校生に対するお部屋探し・住替えのご相談受付、明治学院大学女子寮「セブンレンス館」の運営管理をしています。

◆大学ロゴグッズ、バッハアカデミーのCD、自動販売機での飲料の販売をしています。



株式会社 明治学院サービス

〒108-0071 東京都港区白金台1-2-37
Tel 03-5421-1555 Fax 03-5421-1556
URL: <http://meijigakuin-s.co.jp/>

【お問合せ先】

明治学院同窓会事務局 〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37 TEL 03-5421-5190（FAX 03-3441-0970）（事務取扱い時間 9:00～16:00）
<http://meigaku-dosokai.jp>

Dosokai
Information

同窓会

インフォメーション

ABOUT

同窓会とは？

明治学院同窓会は明治学院の各学校すべての卒業生の組織です。ひとりでも参加しやすい同窓会をモットーにしています。



▶明治学院同窓会はこちら 明治学院同窓会



島崎藤村生誕一五〇年

今年は島崎藤村生誕一五〇年にあたります。今号ではこれを記念して、本校に関連の深い藤村作詞の「明治学院校歌」について取り上げます。

ここに掲載する「明治学院校歌を学ぶ」は音楽家の水野克彦氏（現明治学院大学グリークラブ常任指揮者）がグリークラブ現役のために書き下ろした小論の抜粋です。

明治学院校歌

作詞 島崎 藤村
作曲 前田 久八

人の世の若き生命(いのち)のあさぼらけ
学院の鐘は響きてわれひとの胸うつところ
白金の丘に根深く記念樹の立てるを見よや
緑葉は香ひあふれて青年(わかもの)の思ひを伝ふ
心せよ学びの友よ新しき時代(ときよ)は待てり
もろともに遠く望みておのが志(じ)し道を開かむ
霄(そら)あらば霄を窮めむ壤(つち)あらば壤(つち)にも活きむ
ああ行けたたかへ雄雄志(し)かれ
眼さめよ起(た)てよ畏るなかれ

■新しき時代(ときよ)

学院が建てられた明治という時代自体が日本の「新しき時代」であった。新しい時代には、あらかじめ敷かれた人性のレールはない。ゆえに「心せよ」と覚悟が求められるのである。

■おのが志(じ)し

それぞれの、という意。藤村の自筆文には「志」が出現するので、つい「自分の意志」と解釈したくなるがそうではない。藤村は「し」の音に「志」の漢字を当てたのである。この校歌の終わりに「雄雄志かれ」と使っていることでも、それは分かる。

「新しき時代(ときよ)」にあつては、刹那的、近視眼的に世を渡るのではなく、時間的にも空間的にも遙か遠くに希望を見据えながら「おのが志し」道を開け。新約聖書ヘブライ人への手紙11章1節「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」

■霄(そら)

大空。神の御座である。旧約聖書詩編19編第2節「天は神の栄光を物語り／大空は御手の業を示す」を連想させる。

■窮めむ

「窮」は「極、究」である。「霄を窮めむ」は神を知ること

■つながる。

大地である。神は美しい地を創造なさり、動植物で満たし、その地上を人に管理させられた。また、マタイの福音書5章13節のイエスの言葉「あなたがたは地の塩である」も思い起こす。人は、世のため人のために己を活かすことを求められるのである。

■行け、たたかへ、雄雄志(し)かれ、眼さめよ、起てよ、畏るなかれ

この6つの語は聖書の至る所に発見できる。それゆえ、ここでは一々引用しない。自ら聖書を紐解いて、真理のフィールドを探索するのがよいであろう。この校歌の隅の親石は聖書なのである。「行け」とは、行動を起こせということである。我々の置かれる立場は前段までに叙述され尽くした。今や、そこから行動を起こす時なのである。「たたかへ」とは、無論、戦争に訴えることではない。正義を標榜する戦いでもない。正当防衛の戦いでもない。つまり、暴力ではない。戦う相手は己の弱さである。己の卑怯である。己の傲慢である。己に勝利するために「雄雄志(し)かれ」と励まされるのである。「眠さめ」で「起ち」、「し」かりと戦う相手を見据え、生きるよう「畏るなかれ」と励まされるのである。校歌を作詞した当時の藤村の境遇がどのようなであったかを調べて、思いを馳せてみよ。

2 楽曲分析

藤村の詩は、思想が紡ぎ出されるように発展しつつ流れていく。ゆえに付けられた旋律も詩に寄り添って展開し、歌われていく。そのため一見、明瞭な楽曲形式が認められないように思われるが、そうではない。完全正格終止(属和音から主和音に入り、最高音最低音がともに主音をとる)によつて4つの部分に分けられるのである。

(中略)

作曲者の前田久八について一言述べておきたい。作詞者の島崎藤村が日本を代表する大詩人であるのに比べれば、前田久八は、世に名を知られていないと言いがたであろう。しかし彼は明治学院校歌の一曲をもって、学院から巣立つ後世の若者達に繋がって生き続ける。音楽家として、これ程の喜びは無からう。この曲は名曲である。

明治学院校歌を学ぶ

はじめに

まずは、全学生の皆様には誰よりも校歌に熟知してほしい。なんとすれば校歌は建学の精神を述べ伝えるからである。学院で学ぶとは学院の精神に立脚することである。それはキリスト教精神に他ならない。他校とは比較できない独自の建学精神を自覚し、誇りと希望を持って勉学に励んでもらいたいのである。この小論には校歌の合唱編曲試案を載せた。(合唱編曲試案は省略)大前提として断わっておくが、もしも作曲者である前田久八の自筆楽譜が存在するならば、それが校歌の音楽部分に関わる全ての原典となる。だが残念ながら自筆楽譜は見つかっていない。

1 歌詞を学ぶ

■あさぼらけ
夜明けのこと。若者は人生の夜明けにいる。無限の可能性へ向けて新しく始まる一日に、第一歩を踏み出す存在なのである。

■われひと

我人。つまり自分と他人のこと。直前の「鐘は響きて」は、ただ単にそこで鐘が鳴っ

ているというのではなく、鐘は打たれて響き、その響きが我の胸を打ち、そして他の胸をも打つのである。我々は学院建学の精神に打たれて鐘のごとく響きを生じ、人の心に伝播させていきたいものである。靈感に富む詩的表現である。

■記念樹

明治学院同窓会百年史によると、1891年(明治24年)に卒業した三十数名(島崎藤村を含む)が記念樹を植えたという。現在、チャペルのオルガン側に立つ3本の楠の木がそれである。

■根深く

記念樹が「根深く」立つのを見よ。そのように君も白金の学舎に深く根を張り、人として立つ土台を築きたまえ。

■緑葉

若き学徒を喩えるには若葉でもなく青葉でもなく、新緑の季節に目にも鮮やかな緑葉がもつともふさわしい。緑葉は将来へ向けてどのような成長する、そのようなしなやかさと逞しさを持つ。

■香ひあふれて

若者の横溢するエネルギーを表現するのである。あふれるのである。例えば、香りただよう……などのぬるい表現はしない。

おわりに

「明治学院校歌を学ぶ」と題して論じてきたが、不十分ながらもひとまず考察し終えてみると、いつの間にか「明治学院校歌『に』学ぶ」と助詞を改めている自分に気がついた。それは、校歌を理解しようとする自分の能力には自ずと限界があったけれども、その中で逆に校歌から受動的に教えを授けられた、そのような恵みを味わったということである。

では校歌に何を学ぶのか。それは、人がそれぞれ異なる人生を歩むように学ぶところもそれぞれであろう。しかし、己の人生と真剣に対峙せねばならぬ瞬間が必ず訪れるとすれば、そのとき校歌はあなたに確かな指針を与えてくれるに違いない。そのような素晴らしい校歌を得られて諸君は幸せである。

プロフィール 水野克彦氏

音楽家、東京藝術大学卒業、在学中は東京藝術大学バズカンタークラブに在籍し、小林道夫氏の薫陶のもとにバズの教会音楽作品を研究した。卒業後は十代の頃から親しんできた合唱音楽や教会音楽へ次第に傾倒する。現在は指揮者としてマチュア合唱団の指導に力を注ぎ、オルガン演奏もライフワークとして取り組んでいる。明治学院大学グリークラブ等の常任指揮者。日本オルガニスト協会会員。日本オルガン研究会会員。日本バプテスト連盟愛荷谷キリスト教堂オルガニスト。

島崎藤村生誕150年 特別企画

「馬籠から白金・小諸を経て白金へ」

明治学院大学シネマ研究会とのコラボで、島崎藤村が校歌を作詞するまでの功績をたどり、映像化いたしました。2022年11月にYouTubeで配信いたします。

2022年11月
YouTube 配信

ホームカミングの開催を1年延期いたします。

今年は3年に一度のホームカミングを開催する年ですが、新型コロナウイルスの感染が拡大している状況を鑑み、開催を1年延期することにいたしました。2023年11月に白金キャンパスで、またお会いいたしましょう。

支部紹介

毎号、全国・海外にある支部を順次ご紹介しています。今号は、小樽後志支部、福井県支部、山口県支部です。
それぞれが情報交換の場として独自の企画・イベントを開き、皆さん楽しんでいらっしゃいます。



01 小樽後志支部

02 福井県支部

03 山口県支部



▶明治学院同窓会支部はこちら
https://meigaku-dosokai.jp/?page_id=5

01 小樽後志支部

札幌支部から別れた小樽後志支部は小樽市、余市積丹半島方面、倶知安ニセコ、ルスツ方面と広範囲ですが、人口は24万人程です。交通の便が良いとは言えないので、余市を除けば小樽以外の方々の支部総会参加はなかなか難しい状況です。そんな中で近場の連中は時折ミニ支部会を行ってありました。コロナ禍では厳しかったです。今年は5月7日小樽市郊外旅館朝里宏楽園で花見(昼食会)を行いました。今年は桜が早く、時すでに遅しでした。でも素敵な和食と会話で時を楽しみました。

最近の明治学院会報にこの3月明治学院名誉教授を辞められた樋口隆一先生が載っておりました。彼の祖父樋口季一郎陸軍中将は日本のシンドーラーと言われる杉浦千畝と同じ様に、満州でユダヤ人をナチスの虐殺から救う為に尽力した軍人です。彼はソ連から北海道を救った人でもあり、戦後わずかですが小樽の郊外に住んだこともあります。昨

秋石狩市の古民家を利用して「樋口季一郎記念館」が出来ました。オープンには樋口隆一先生が講演したそうです。近いうちに訪れたいと思います。

当支部の仲間を数人紹介します。まずは幹事として当支部を引っ張っている

1982年卒の第一ゴム(株)の社長藤本雅彦さん、1973年社会福祉学科卒の阪口光男さんは社会福祉法人後志報恩会理事長として、明学の精神を実行しています。岩内の紀哲郎さんは岩内の産物にしんを材料とした商品作りの一八工業水産(株)、誰もが楽しく食事出来るレストラン遊人庵経営の田島明宏さん、32歳の中野諭さんは阿部建設(株)の社長の片腕としてそれぞれ活躍しております。

我々高齢者組の刺激になつていきます。



金久保 兵士郎
小樽後志支部
(1967年 経済学部商学科卒業)



02 福井県支部

北陸三県で石川、富山に次いで設立された福井県支部。両県に応援してもらいながら活動を続けています。

年一回の総会に集まってくる先輩、仲間に会えるのが楽しみで、酒を酌み交わしながら近況を語り合っています。ホテル、割烹店、レストラン、居酒屋と会場は様々ですが、この二年間は開催できずとも残念です。

ブロック会議を石川県支部長の提案で、昨年と今年、オンラインで開催することができました。しかし、県内の多くの会員との交流はできずじまいで、今年こそは懇親会ができるようにと願っています。

4年前の総会に「グリフィス福井書簡」という本が幹事から配られました。著者は県内在住の大先輩。総会には行けないからみなさんにといいことでした。グリフィスとは幕末に福井の藩校で、理化学の教師として多くの若者を指導した人で、明治学院



歴史資料館資料集にも登場します。

明学と福井県との縁を、また一つ発見することができました。



前川 徹
福井県支部
(1986年 社会福祉学科卒業)

03 山口県支部

2020年に支部長を引き継ぎました山口県支部の岡と申します。残念なことに2019年の支部総会開催以降は新型コロナウイルス感染拡大のため支部活動は休止中。支部の皆様にお会いできる日を心待ちにしながら支部紹介をしたいと思います。

山口県支部は2009年(平成21年)7月25日に支部設立総会が開催され支部として承認されました。支部総会の案内に「行ってみよかな?」とそれほど深く考えることなく出席いたしました。私を含めて参加された方々が全員が役員として役割を分担することとなり支部設立となりました。山口県では支部設立総会前の7月21日に未曾有の大雨で大きな被害が出ました。私が住む周南市から会場となった山口市までもいつも使う道路は冠水や土砂崩れで通行止め(その地域の被害は大きくその後復旧までに1年を要しています)となっており大きく迂回する必要がありました。欠席することも考えましたがせっかくだからと電車とバスを乗り継ぎ会場のホテルまで行ったことはしっかりと記憶に残っております。参加者は

15名ほどと少なかつたですが、おかげで和気あいあいとした話で盛り上がりました。参加者の多くは男性の大先輩。設立総会案内はがきの返信の近況を讀ませていただき県内にこれほど多くの明治学院の同窓生がいらっしゃることにも驚かされました。その後、1年に1回支部総会を開催し、十数名から多くて20名程度の参加者で近況報告を交わしつつ大学時代を懐かしんでいます。学生運動が活発だった世代の先輩はほぼ授業がなかったなど歴史を感じる話もお聞きできました。わたくしが大学を卒業してすでに40年以上経過しています。山口県支部同窓会参加者の中ではまだ若輩者の部類かもしれませんが。この支部紹介を讀んで総会や懇親会に参加していただければ同窓生が増えることを願っております。また、支部活動が山口在住の若い同窓生への情報提供やネットワークづくりの一端を担い、地域で明治学院卒業生が活躍できる場につながればよいなあと考えています。



岡 美絵
山口県支部
(1980年 社会福祉学科卒業)





明学で いい友

Vol. 4

2021年4月からスタートした新企画「明学でいい友(とも)」。
毎回お二人の同窓生にご登場いただき、
在学中のこと、卒業してからのこと、そして現在のことを語っていただきます。

“Do for Others”の 実践のために学び続ける

田島 幸雄（83年社会学部社会学科卒）



明治学院とのお付き合いは私が明治学院中学校へ入学したことで始まりました。その後明治学院東村山高校を経て大学卒業まで計10年間の学生生活で「明治学院」にお世話になりました。中高ではサッカー部に所属し、特に高校時代は先輩方が全国高校サッカー予選やインターハイ予選で好成績を残していたので当然部活動での目標は高く、毎日泥だらけで練習に明け暮れる日々でした。

高校卒業後は社会学部社会学科へ進み、部活動には、これからの時代は英語力が必要になるはず！との思いで、E.S.S. (English Speaking Society) を選び入部しました。入部当初は自分が伝えたいことを英語で表現できない辛い日々でしたが、毎日昼休みに行った基礎英会話練習、夜のディベート、ディスカッション、スピーチなど大会へ向けた活動により英語でコミュニケーション

ンがとれるようになり部活動が楽しくなってきたのです。2年生の秋に先輩と組んで出場したディベート大会で優勝し、3年生最後のディベートの全国大会では同期5人で組んで上位に食い込むことができたのです。充実した部活動生活だけでなく4年時に卒論執筆をゼミ同期と正月返上で頑張ったこともいい思い出です。

大学卒業後は広告代理店に入社し、外資系企業中心に担当する営業部門に配属され、大学の部活動で真



剣に取り組んだ「英語」を日々使うことになりました。大学時代にはかなりの時間を費やした部活動を通して身に付けたことを活かすことになったのです。その後、グローバル市場での業務が多くなり、北米、欧州、中東、アジア・太平洋諸国へ頻繁に出張し、各国の人々、文化を知ることができ、人脈が広がり自分自身の成長につながりました。その後、2019年春には既に勤務先で経験しているスポーツ関連の仕事へ更に深く関わっていくための第一歩として筑波大学大学院人間総合科学研究科修士課程に入学、昨年3月修了し、スポーツ・健康プロモーション領域の研究活動をスタートしています。いままでのビジネス経験に加え、新たな道を切り開こうと研究の世界に飛び込みました。

明治学院には、学部での日々の勉強と部活動で得た学びはもちろんのこと、私の人生においてかけがえのない存在となった多くの先生方、先輩方、友人たちとの出会いを得ることができ心から感謝しています。今後も多くの方々に支えて頂きながら、私が社会や人々のために役にたてるよう、より一層精進していきたいと思っています。

次に、同期の中山隆由さん（83年経済学部経済学科卒）へ「たすき」を渡します。

好きこそものの上手なれ、 そして感謝

中山 隆由（83年経済学科卒）



私の明学歴は、1973年（昭和48年）に中学入学から始まり、高校卒業まで野球場・陸上トラック付グラウンド・ラグビー場などのある明治学院東村山校で過ごしました。中学受験で学校を訪問した際に、これだけのスポーツ施設に驚いたことを覚えています。中・高6年間のほとんどをサッカー部（部活命！）で明け暮れ、顧問の先生約10年前に他

界された大谷東洋先生）・チームメイト・先輩後輩とは未だに繋がりがありません。大谷先生からの在学中の数えきれないご指導の中で、今でも覚えている教えがあります。それは「好きこそものの上手なれ」という教えます。サッカーがうまくなりたければサッカーを好きになりなさい・チームを好きになりなさいと理解していました。この教えは後の人生に通じていました

（もちろん、自分の子供にも伝えました）。大学は経済学部経済学科で、体育会サッカー部には入部せず、1年の秋からは高校サッカー部の先輩がいらしたテニスサークルに入り、プライベートチームのサッカーとテニスに明け暮れた大学時代でした。テニスサークルは私が3代目と歴史が浅いサークルでしたが、初代と

2代目キャプテンが基礎を作り、他のサークルと協力して3年時にサークル対象の「明学オープン」を開催しました。

これが縁なのか、大学卒業後はテニス関連の仕事をし、30歳を迎えたところで父が開業していた税理士を目指すことになりました。部活チームの成績不振や勉学の不出来という谷はありましたが、資格が取れず親に迷惑をかける谷があり、そしてその父が

病に倒れたことにより顧問先と職員が離れ、事務所を維持していく難しさがあるとは予想だにしていませんでした。そこから少しずつ持ち直して来ているのは、先輩や同年代の税理士の皆さんに助けられたことでした。同業者との繋がりはやはりサッカー・テニス・ゴルフというスポーツで、ゴルフはかなりのめり込んでいますし、サッカーは東京都シニアリーグと税理士会のチームで続けています。

中高で教わった「好きこそものの上手なれ」



の精神でスポーツに取り組んだことが私の人間関係を作ることになり、顧問先様を含め私に関わる全ての皆様に感謝しております。この年になってもまだまだ学ぶことが多くあります。これからも「好きこそものの上手なれ」の気持ちと日々感謝を忘れずに生きていきたいと思っています。次に、同業者の大石尚彦さん（80年法律学科卒）に「たすき」を渡します。